

山形県におけるハナヤサイ「みかど魁1号」の 生態について

鈴木 洋・柿崎正策

(山形県農試)

夏採り型といわれる南方系ハナヤサイであるみかど魁1号(1961年千葉県みかど育種農場より発表)の播種時期による生態を知り、従来山形県で栽培の困難であった露地播種による夏採り型栽培技術の確立を図る目的で、1963年より64年にかけて本試験を実施したものであるが、その成績の一部を報告する。

1 試験材料及び方法

魁1号と生態的に類似する武蔵(武蔵野種苗園)及び山形県での早生系の代表的品種である野崎早生(野崎採種場)を比較品種に供試した。更に第1表に示す供試条件のもとに1区38株(1964年度は56株)について調査を行なった。なお、育苗期間は全区寒冷沙被覆とし、畦巾75cm、株間40cm、10a当り施肥成分量(N:30, P₂O₅:12, K₂O:18kg)

第1表 供試条件
1963年

回数	播種期	移植期	定植期	育苗日数
1	6.10	6.24	7.22	43
2	7.1	7.17	8.7	38
3	7.20	8.5	8.23	35
4	7.30	8.13	9.4	38

1964年

回数	播種期	移植期	定植期	育苗日数
1	5.20	6.1	6.20	32
2	6.1	6.10	7.1	31

などの栽培によつた。

2 試験結果と考察

1 生育状態

定植時における苗の生育は第2表に示すように、各

第2表 定植時における苗の生育

播種期	魁1号		武蔵		野崎早生	
	草丈	葉数	草丈	葉数	草丈	葉数
6.10	25.7 ^{cm}	8.1	25.7 ^{cm}	8.4	19.1 ^{cm}	7.2
7.1	18.0	8.4	17.3	9.0	12.6	6.7
7.20	22.9	7.0	23.1	7.0	12.8	5.8
平均	22.2	7.8	22.0	8.1	14.8	6.5

播種期とも四季群に属する野崎早生より南方系である魁1号及び武蔵が伸長早く、どちらかといえば前者はガツチリしたタイプ、後者は徒長的タイプとなる。

定植後の生育観察でも葉の形状・葉色・草姿も異なり野崎早生は葉が丸型、濃緑でやや横繁性であるのに対し魁1号及び武蔵は細長く、黄緑で立性であり、野崎早生とあきらかに生育が異なる。

2 播種期と収穫期

6月10日播種では、野崎早生の場合10月2日に収穫が開始され、その所要日数が114日に対し、魁1号及び武蔵は8月24日、その所要日数が76日で非常に早くから収穫される特徴を持っている。7月1日、7月

20日播種でも6月10日播種同様に野崎早生より魁1号及び武蔵が35日程度早期に収穫が行なわれた。播種後収穫までの所要日数は播種期により多少異なるが、平均でみた場合に、野崎早生が118日、魁1号が81日、武蔵82日となり、収穫最盛期も野崎早生

より順次早くなることが認められた。収穫期間は野崎早生が12日、武蔵15日、魁1号は23日の長期間に収穫が継続され、特に播種期が早い程この傾向が強いように思われる。

第3表 播種期と収穫期

播種期	品 種	収穫始	所要日数	最盛期	所要日数	収穫終	収穫期間
6.10	魁 1 号	8.24	76	8.24	76	10.7	45
	武 蔵	8.24	76	9.12	95	9.23	38
	野 崎 早 生	10.2	114	10.2	114	10.28	27
7.1	魁 1 号	9.26	88	10.2	94	10.16	21
	武 蔵	9.26	88	9.30	92	10.2	7
	野 崎 早 生	10.19	111	10.28	120	11.8	10
7.20	魁 1 号	10.7	80	10.11	85	10.28	5
	武 蔵	10.11	84	10.11	85	10.11	1
	野 崎 早 生	11.26	130	10.26	130	11.26	1
平均	魁 1 号		81		85		23
	武 蔵		82		90		15
	野 崎 早 生		118		121		12

備考 7月30日播種区、各品種ともに正状花ツボミ認められない。

3 時期別収量と品種生態

6月10日播種は、野崎早生の場合に10月から収穫を開始したが、魁1号及び武蔵は8~9月に殆んど収穫が終了している。したがって8~9月に収穫できる量が多い。

7月1日播種は野崎早生の場合10月と11月に収穫がされたのに対し、魁1号及び武蔵は9~10月に収穫が終了し、7月20日播種でも魁1号は野崎早生より早い時期から開始され収穫が終っている。

第4表 時期別収量と品種生態

1) 6月10日播種

品 種	8月		9月		10月		計		平均 個重	不良花 ツボミ 数	正状花 ツボミ 率	花ツボミ 直 径	重量 / 直径
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量					
魁 1 号	15	Kg 4.806	21	Kg 15.422	2	Kg 4.901	38	Kg 25.129	660		100.0	135	488
武 蔵	6	1.448	17	7.365			23	8.813	383	15	63.8	13.9	27.5
野 崎 早 生					38	28.826	38	28.826	758		100.0	14.5	52.2

2) 7月1日播種

品 種	9月		10月		11月		計		平均 個量	ボトニ ング数	不良花 ツボミ 数	正状花 ツボミ 率	花ツボ ミ直径	重量 / 直径
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量						
魁 1 号	9	Kg 6.320	27	Kg 20.230			36	Kg 26.550	737	1	1	94.7	14.2	51.9
武 蔵	12	6.286	6	2.784			18	9.070	503	3	17	50.0	14.0	35.9
野 崎 早 生			13	17.100	24	19.950	37	37.050	1,001		1	97.3	17.6	56.8

3) 7月20日播種

品 種	10月		11月		計		平均 個 重	不良花 ツボミ数	ボトニン グ 数	正状花 ツボミ率
	個数	重量 Kg	個数	重量 Kg	個数	重量 Kg				
魁 1 号	17	11,347			17	11,347	667 ^g	17	4	47.2%
武 蔵	2	700			2	700	350		36	5
野崎早生			38	40,750	38	40,750	1,072			

4) 7月30日播種

品 種	ボトニン グ数	同左率	正状花ツボミ数
魁 1 号	38	100.0	0
武 蔵	38	100.0	0
野崎早生	38	100.0	0

5) 5月20日播種(1964)

品 種	収穫始	所 要 日 数	8 月		平均個重	ボトニン グ数	リーフ イ 数	正状花ツ ボミ率	花ツボミ 直 径	重量 / 直径
			個数	重量 Kg						
魁 1 号	8月5日	78	14	4,282	205 ^g	41	1	25.0%	14.5 ^{cm}	141
野崎早生										

魁1号は武蔵と同時期に収穫されている武蔵が花ツボミ表面の毛ば立ち及び粟粒状等の不良花ツボミ数が非常に多く、しかも1個平均重が小さい。又花ツボミの重さと直径の比(重さ/直径)も小さい。これは花ツボミの肉質が粗であることを示しており、魁1号が武蔵より品質的に勝れていることを示していることになる。ただし、重さ/直径比が生育期間の長い野崎早生より小さく緻密さが劣るが、反面野崎早生の欠点である花ツボミが角張ることが比較的少ない良さを持っている。総収量(正状花ツボミ重)は野崎早生より少ないが武蔵より多い。

7月1日、7月20日播種も6月10日同様の傾向がみられたが、播種期が遅くなるにつれて不良花ツボミ数及びボトニング(早期小結ツボミ)の発生が増したが武蔵に比較して非常に少ない。

7月30日播種では3品種とも100%ボトニングが発生し正状花ツボミの収穫ができなかつた。山形県の場合これらの品種では7月30日の晩播は無理である。

更に魁1号を早期に播種した場合に正状花ツボミが収穫できるかどうか、ボトニングの発生状態をみるために1964年5月20日及び6月1日に野崎早生と比較しながら試験継続中であるが、5月20日播種の

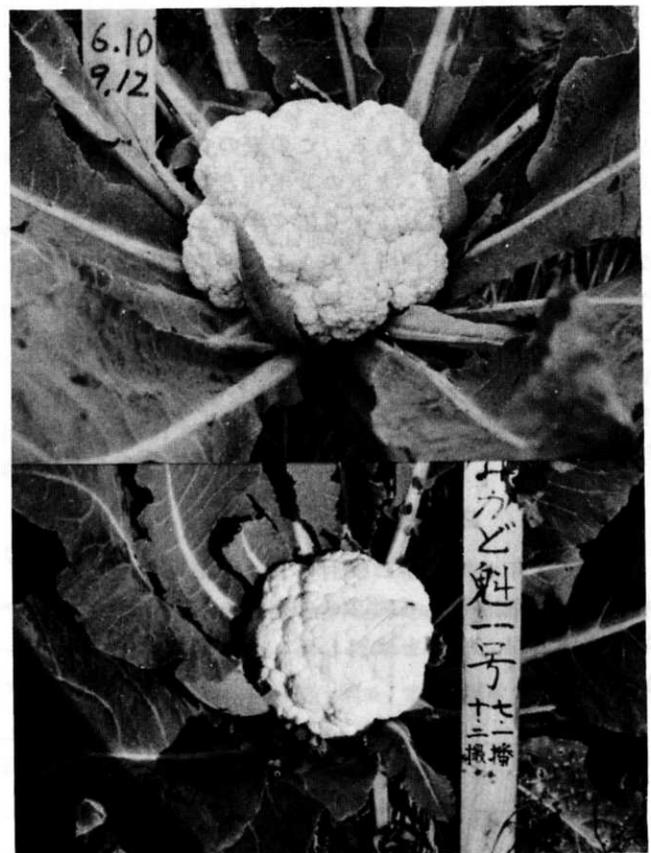


図1 みかど魁1号の花ツボミ
上：6月10日播種，9月12日撮影
下：7月1日播種，10月2日撮影

場合第4表5)に示すように、魁1号は7月1日頃より発蕾し、その後ボトニングの発生が非常に多く、正状花ツボミ率が25.0%に低下した。その正状花ツボミも6月10日、7月1日播種区のような大きい、しかも花ツボミ表面がキメのこまかいものができず重量/直径比が小さくなり品質的に劣る花ツボミとなつた。同時期に播種された野崎早生は8月20日現在でも全然発蕾が認められない。

6月1日播種区は8月12日(所要日数:73日)から少しずつ正状花ツボミが収穫できるようになつた。その花ツボミは幾分5月20日播種より花ツボミの大きいものである。しかしボトニング及び不良花ツボミ数が

約30%程度は発生するのではないかと観察される。

以上のようなことから、魁1号は野崎早生より温度に対する感応度は非常に強く、そのため極端な早まき遅まきはボトニング及び不良花ツボミ数を増加させ非常に危険である。山形県の場合6月10日~30日頃の間、特に20日を中心に播種し、野崎早生の収穫前すなわち8月下旬から9月を目標に収穫する栽培型に適する品種と思われ、夏どりハナヤサイとして充分実用価値があり、本種を活用することによつて、山形県でも露地播種によるハナヤサイ夏採り栽培が可能である。

玉葱の直播栽培について

松本良一郎・菅野清司

(岩手県園試南部分場)

1 ま え が き

岩手県南部沿岸地方は1958年より玉葱集団栽培がはじまり、現在は60haとなつている。この地帯の農業は沿岸零細農漁家であつて、畑は主として麦大豆の年2毛作地帯である。この麦の代換作物として玉葱を導入し、玉葱・大豆の2毛作とした。2毛作地帯の当地方にあつては11月第2半旬より急に低温となるため、玉葱の定植限界が11月始めまでとなり、前作との関係から定植期間が極めて短縮され、加うるに玉葱栽培において最も労力を多く必要とする作業が定植であるので、この隘路を打開する一方策として、玉ねぎ直播栽培の研究を採り上げた。ここに1962年、1963年の2ヶ年の試験結果を報告する。

2 試 験 方 法

1962年は播種量の検討をし、播種期の設定は移植栽培の播種適期より約20日遅れとした。1963年は直播の早、晩播を検討した。その概要は第1表の如くである。

第1表 試験方法の概要

1962年播種

区番	播種量	備考
1	10a当0.6ℓ	播種9月15日
2	" 1.2"	畦巾80cm, 3条, 条播
3	" 1.8"	同引き4月9日

1963年播種

区番	播種期	播種量	備考
1	9月10日	0.9ℓ	畦巾80cm
2	"	1.5	3条, 条播
3	9.17	0.9	間引, 4月9日
4	"	1.5	収穫7月5日
5	9.24	0.9	1区 13.2m ²
6	"	1.5	2区制
7	10月30日	定植	

3 試験結果と考察

1 1962年播の結果(播種量)

苗立数: 4月9日越冬後調査の結果は第2表のとおりで、すなわち移植栽培標準播種量の10a当り0.6ℓ区は、標準定植数a当り3,100本とほぼ同数であり、播